

## 国際協力特別賞

「グローバル化への鍵は」

静岡県立三島北高等学校 1年

原 茉莉香

「異文化」の反対語はなんだろう。「同文化」だろうか。「等文化」だろうか。正解は分からないが、私がそれに答えるなら、「自分」と答えるだろう。「異文化」と辞書で調べてみた。「価値観や言語、習慣や行動様式など、自分が親しんでいる文化とは規模・営みの異なる文化」と書かれていた。自分の普通とは違うから「異なる」という文字が使われているのだろう。私は「異文化」という言葉が存在していることに異論がある。

私は幼い頃、父の仕事の関係でフィリピンに住んでいた。フィリピンのアパートに住み、フィリピンの幼稚園に通っていた。使う言語は英語とタガログ語、食べ物や生活習慣、通貨やルール、マナーも日本とは違う。しかし、だからといって私は友達ができなかったり、生活に困ったり、苦勞することはなかった。小学校5年生のとき、アメリカのユタ州に2週間ほど研修旅行に行ったことがある。ホームステイ先の家庭はモルモン教だった。モルモン教の教会に行行って行事の準備をしたり、食べる前にみんなで手をつないでお祈りしたり、日本では経験することのない、アメリカの「日常」を過ごすことができた。また、小学校6年生の夏、父が5年ほど出張していた国、ラオスに行った。屋台には素揚げしたココロギ、みかんの葉と一緒に揚げた蚕のさなぎなどの昆虫が売られていた。日本では到底想像できない光景だろう。朝になれば法衣に身を包んだ僧侶たちが列になって歩き、町の人たちは僧侶が持っているかごにもち米やおかず、お菓子を入れる。お米は基本もち米で、箸などは使わず手で食べる。日本人にとっては馴染みのないことだらけだが、フィリピンやアメリカ、ラオスの人にとっては、それが自分たちの普通であり、「文化」だ。その人たちから見た日本は「異文化」だろう。

マケドニアを支配したことで有名なアレクサンダー大王は、異文化の土地を嫌い、自分のものになるよう戦って支配した。このように「異文化」は警戒対象であり、時には排除したくなったり、攻撃したくなったりするものだ。しかしそれは「異文化」という言葉を用いるからではないだろうか。外国は外国であり、日本は日本であることは変わらないが、それぞれがそれぞれの文化や習慣を守り続けている。そう考えると警戒したり、攻撃したりできないだろう。今世界中でグローバル化を目指し、様々な活動に取り組んでいる。SGHに指定されている三島北高校もその1つだ。グローバル化を達成するには、「異文化」という意識を無くすことが必要だろう。

「文化が違うから」、「外国の人は苦手」、そう言っている人たちが自分たちの文化に対して同じようなことを言われたらどう思うのだろうか。それらの言葉は、自分とは違う考えを持っていたり、違う生活をしていたりする人と関わりたくないと言っているのと同じことだ。苦手な相手がいることは仕方がないし、悪いことではない。だが、だからと言って関わることを避けて良いのだろうか。私は「異文化」はそれぞれの意識の問題だと捉えている。同じ環境に住み、同じものを食

べ、同じ言葉話す私たちだって、それぞれ個人差がある。そう考えると「異文化」は個人差の集合体でしかないのかもしれない。ならば、その違いを「多様性」ととらえることだってできるはずだ。世界中の人が「異文化」を「多様性」ととらえ直したとき。それは、グローバル化に向けて第一歩を踏み出したときだろう。